

## 第 4 回伊勢湾漁業影響調査委員会における指摘と対応について

検討項目	指摘	対応
重要な漁業生物の現地調査結果について	実際にあった食害やアカグサレ病の状況が捉えられていないが、ノリの調査が不足しているのではないかな。	既存資料を活用して不足情報を補足した（資料 2 参照）。今年度も同様の資料収集により情報を補足する予定である。
	メイタガレイの調査結果をみると、産卵場所は既存知見で言われている外海だけではないのではないかな。	既存知見にこだわらずに今後検討を進める。
	<ul style="list-style-type: none"> <li>▪ 中部国際空港周辺には重要な生態系が形成されており、カレイの着底場もあることがわかってきた。この場所が伊勢湾の中でどの程度重要な場所なのかを検討する必要がある。</li> <li>▪ 産卵親魚による G S I 調査を他の魚種でも実施してはどうか。</li> </ul>	今年度は候補地周辺での産卵がありそうなマゴチやシロギスを対象にした産卵親魚調査を実施している。また、底魚調査等で多く採集される魚種は、その採集サンプルを対象にした生殖腺の観察を実施している。また、マコガレイ、イシガレイの産卵親魚調査を実施する。
平成 27 年度検討内容について	藻場・干潟調査等では、仕様書の測線距離にこだわらずにフレキシブルに調査してほしい。	適切な曳網場所、距離を具体的に設定して調査を実施している。なお、現地の状況に変化がある場合は、現地で適切に判断して設定を変更する。
	護岸生物調査における植物プランクトン、懸濁物、付着藻類などの物質循環に関する調査が必要ではないかな。	今年度の護岸生物調査結果を踏まえて、次のステップで実施したいと考えている。
	現調査計画書に記載されているマコガレイ産卵場の調査測線では卵は採取できないと思う。	標本船調査結果、底質の分布、逆解析シミュレーション結果等から総合的に調査測線を設定した（調査方法：資料 2 参照）。
	底質分析項目として、全硫化物を追加したい。	今年度調査分は白龍が実施している調査結果を参考にする。今後の調査では追加を検討する。
	採水による動物プランクトン分析は行わないのかな。	採水による分析も実施している。
平成 27 年度伊勢湾シミュレータの検討内容	アサリ浮遊幼生について、秋産卵群の再現性にも留意して検討してほしい。	三河湾では秋産卵群が過小に計算されている点などが課題であると認識しており、今後、アサリの成貝量の季節変化の設定

について		方法などを見直し再現性の向上を図りたい。
	アサリ浮遊幼生の挙動の評価だけでなく、浮遊幼生の着底後、稚貝・幼貝に成長する際の生残に関する評価も実施する必要があるのではないか。	今後の検討課題であることは認識している。現段階では浮遊幼生の挙動を正確に評価できるよう検討を進めている段階である。
	<ul style="list-style-type: none"> <li>▪ アサリの産卵回数を変更したことにより、発生する幼生数の総量は変化したのか。計算条件を教えてください。</li> <li>▪ アサリの産卵頻度を3時間毎に変更した点などの計算の条件設定について、設定の考え方・論拠があることが望ましい。</li> </ul>	発生させる幼生の総量は変化させていない。今後、計算条件やその考え方について詳細を記載する。
	アサリの産卵強度について、水温だけでなくアサリの肥満度を考慮した計算はできないか。	産卵強度を水温によって推定する手法により、概ね湾内の浮遊幼生量が再現できているため、現時点では肥満度を考慮した計算は想定していない。
	マコガレイが日中鉛直移動すること、潮汐に応じて行動パターンを変えることを踏まえると、逆解析シミュレーションによる産卵場の推定は難しいのではないか。	難しい検討であることは認識しているが、マコガレイに関する情報が限られている中では、逆解析により産卵場を推定し、そこから底質分布や既往の知見を含めて産卵場を絞り込み、実際にそこで産卵が行われているかを現地調査で確認するという手法が適切と考えている。
	伊勢湾は上下層に流れの向きが異なるので、マコガレイの鉛直移動の有無によって推定結果は大きく変わるだろう。検討にあたっては、鉛直移動の有無による結果の差異を把握するなどの感度解析が必要だろう。	ご指摘いただいた方針に沿って検討を行う。